教育通信 No,14

環境が変わっても
粘る、粘る、粘る、粘る 根張る
そう俺はここに根を張る
根無草

～和泉市立和泉中学校の学校公開～

No,9で、和泉市立和泉中の取組について、紹介しました。今回は、指導助言者として招待されていた石井先生の話を抽出して紹介したいと思います。

指導・助言（京都大学　准教授　石井英真　先生）

つながりの大切さ

和泉中学校では、子ども同士の関係構築を重視した教育「学び合えるグループづくり」という土台が、パフォーマンス課題重視の流れで崩れつつある。和泉中は「今が分岐点である」と話し、「課題（パフォーマンス課題）で生徒を引っ張る」のか「学び合いや協力で生徒を引っ張る」のか、学校としての方向性を明確にする必要性がある。

もし、パフォーマンス課題で引っ張るのであれば「みんなで顔を合わせて、学力を合わせていないと解けない問題」としてレベルを設定することが必須である。ただ、注意すべきことが二つある。

１つ目は、パフォーマンス課題＝評価課題という考えで作ると、生徒の意欲（波）で取り組み度合が変わってしまうため、「評価する」というのは大事だが、前面に押し出さない方がよい。

２つ目は、1年生では関係性が十分に築かれていない段階でパフォーマンス課題に取り組むと協力がうまくできずに授業が成立しない、大きく崩れてしまうと立て直しが困難になるため、3年間かけて丁寧に関係性を構築し、その土台の上でパフォーマンス課題や自由進度学習を進めていくアプローチが効果的である。

ICTのバランス

タブレット活用が進む中で、ICT活用の偏りがグループ活動の阻害要因になっている可能性がある。１時間の授業、１単元の授業すべてをタブレットですると、「円」が形成しづらく、視線の交差が減少します。

ICTの本来の利点は「一人一人の学習履歴を教員がすくい上げ（気づき）やすい」ことである。生徒のつまづきをＩＣＴで（を通して）気づくことこそICTの活用である。

また、タブレット活用において気をつけるべきは、生徒が見た目を「デコる」ことに終始せず、内容をしっかりとまとめた上で表現を工夫するよう導くことです。SNSとパソコンの違いは『まとまった言葉として形になるかどうか』であり、教科の学びとしての質を常に意識させることが重要。

グループでの学び合いにおいて口頭のやりとりだけでは大事なことが流れてしまうため、ホワイトボードのような共有ツールを活用して言葉を可視化することが「聞き書き」の力を育てることにもつながり、円を形成したり、視線の交差が生まれやすくなる。

教師の役割

現代の教師に求められていることは「遠隔性のスキル」と「つまずきに気づくスキル」である。遠隔性とは「ここを教えたい・理解してほしい」という点を直接的に教えるのではなく、生徒自身の気づきを促すような関わり方です。生徒のつまずきに気づいたら、その場で適切なサポートを行い、生徒と材、生徒と生徒、生徒とICT、をつなぐ役割を果たすことが求められています。

授業において「教科の当たり前を壊すような問題・授業」を創出することの重要である。各教科の本質的な面白さを伝えることが「真正の学び」につながります。

現行の学習指導要領の問題点として「活きて働かない問題」、つまり学んだことを生活で活かす機会の少ない。しかし、今の時代は学校と社会との結びつきが強くなっており、実社会での活用を意識した教育が求められている。

教師同士の協働も重要で、授業資料の共有により負担を軽減し、子どもたちが学び合える力を育てることで授業が楽になるという好循環が生まれます。「みんなが安心安全に生活できるインクルーシブ」な環境づくり『生徒同士のつながりを大切にしながら、教職員も共につながり、支え合う学校文化』の構築を目指すべきである。